がん治療前の妊孕性温存について

「妊孕性」とは、将来、子どもをもつために必要な力のことです。
抗がん剤、ホルモン療法、放射線治療、手術などのがん治療は、その内容によって卵巣や精巣の機能に影響し、将来妊娠する・子どもをもつ可能性が低下することがあります。
妊孕性温存療法とは、がん治療を始める前などに、精子、卵子、受精卵、卵巣組織などを凍結保存し、将来子どもをもつ可能性を残すための治療です。選択できる方法は、年齢、性別、病状、がん治療の開始までの期間、パートナーの有無、ご本人の希望などによって異なります。

当院では、がん治療により妊孕性が低下する可能性がある患者さんに対して、できるだけ治療開始前に情報提供を行っています。妊孕性温存について専門的な相談や治療を希望される場合には、がん治療の主治医と生殖医療の専門医が連携できるよう、琉球大学病院または友愛医療センターへご紹介しています。
妊孕性温存療法を希望する場合でも、がんの治療を安全に行うことが最も重要です。病状や治療の緊急性によっては、実施が難しい場合もあります。また、凍結保存を行っても、将来の妊娠や出産が保証されるものではありません。
年齢や病気、予定されている治療などの条件によっては、妊孕性温存療法や保存後の生殖補助医療に対する公的な助成制度を利用できる場合があります。詳しくは紹介先の医療機関でご確認ください。

将来子どもを希望するかまだ決めていない方や、相談すべきか迷っている方も、まずは治療開始前に主治医へお申し出ください。ご本人が納得して治療を受けられるよう支援します。